
[シンポジウム報告④]

東日本大震災の伝承ネットワーク



敬愛大学経済学部教授

矢口 和宏

敬愛大学経済学部の矢口です。私の話になりますが、ここでは東日本大震災の伝承ネットワークという話をさせていただきます。実は今年の8月末に、東北地方の伝承施設や震災遺構の視察をしてきました。8月末の一番暑いときで、東北でも昼は30度を超えています。

最初に、震災の状況から確認したいと思います。恐らく、後のシンポジウムの話題でも関連するかと思いますが、阪神淡路大震災と東日本大震災の違いからお話します。阪神淡路大震災というのは基本的に局地的な直下型の地震です。一方、東日本大震災は広範囲で震災地域が広いです。実際、最大震度6弱以上の件は8県にわたっています。災害救助法の適用が241市町村です。どうしても東北というイメージが付きますが、実はここ、千葉県も被災地です。千葉だって東日本大震災の被災地だということを、改めて確認したいと思います。死亡の原因にしましても、阪神淡路大震災は基本的にビルの倒壊ですから圧死です。一方、東日本大震災は津波ですから水死です。熊本地震の場合は、地震後の孤立した避難生活での震災関連死が問題になりました。このように、地震災害をとってみても、多様性があるということが理解できるかと思います。

では、伝承施設や震災遺構の話に入りますが、実際、東日本大震災からもう9年半たっていますが、2011年5月29日の「東日本大震災復興構想会議」の中で、伝承化はしなければならない、ということは言われています。これが東日本大震災復興構想の中の第1原則で、この段階でもう伝承という言葉があって、教訓を次世代に残すということが言われています。

宮城県では、毎年、県民意識調査結果を行っています。それをみると、防災施策に対する重要性の意識は高いことがわかります。実際、県民の8割以上が防災施策は重要だと認

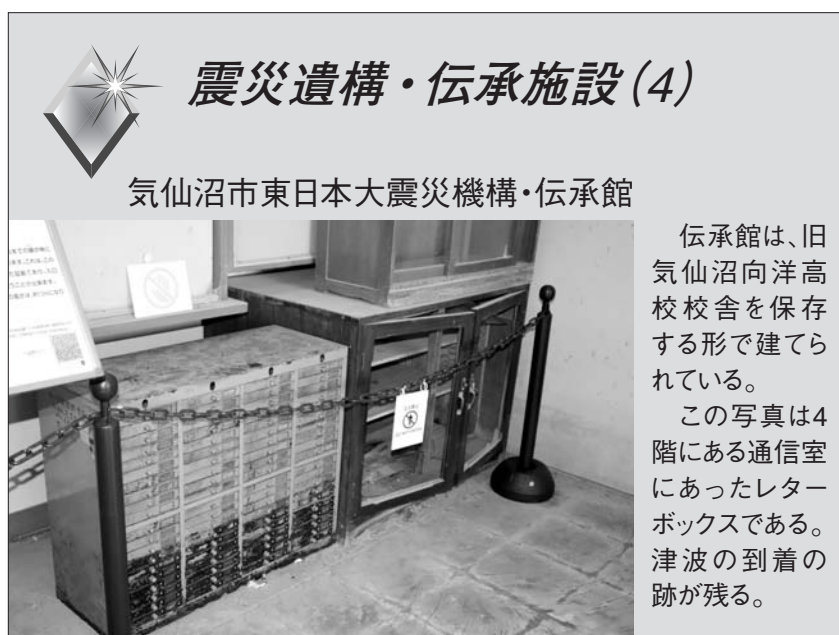
識しています。しかし、満足度はどうかと言うと、それは50パーセント弱です。東日本大震災で一番被害が大きかったのは宮城県ですが、防災施策の重要性は認識しているが、まだ試策への満足度がそれに追いついていないという状況があります。

2018年7月に、国土交通省東北整備局内に「震災伝承ネットワーク協議会」が設置されました。この震災伝承ネットワーク協議会が、震災伝承施設を登録しております。2020年6月19日現在で被災三県236件の伝承施設が登録されています。これから、われわれの研究チームが回った視察先をいくつかご紹介したいと思います。まず、仙台市の荒浜小学校です。3.11の日の映像で、小学校の周りは全部津波だけれども小学校の上に避難していたという映像がよく放送されたと思うのですが、あれが荒浜小学校です。もう現在は、小学校に通う生徒はおりません。ですが、震災の記録を残すために保存されています。説明役の方が当時の様子や学校内の状況を話してくれます。

現在、荒浜地区は災害危険区域に指定されていて居住者はいません。この頃の写真は居住者がいた頃の住宅基礎です。やはりこれも震災遺構として保存されています。実は私が敬愛大学に勤める前は仙台市にある大学に勤めていまして、ここから5キロ内陸のほうに住んでいました。

これは石巻の大川小学校です。私と先ほどの根本さんも写っていますが、案内してくれている方が大川伝承の会、共同代表の鈴木さんという方です。実は鈴木さんの次女が震災時、在校生で津波被害で亡くなっております。遺族の方なので、切実な話もされました。ちょうどここにカメラがあると思いますが、これは東北放送の取材クルーです。この日は東北放送でも鈴木さん取材していたのです。

こちらが気仙沼市の伝承館（スライド4-1）という所です。ここは気仙沼向洋高校、昔の気仙沼水産高校の校舎です。水産高校ですから通信室があり、そこの4階にレターボックスがあります。レターボックスの色が変わっていると思います。こんな所にまで津波がき



スライド4-1



震災遺構・伝承施設(5)

高田松原国営追悼・祈念施設



祈念施設内には「奇跡の一本松」がある。

左の写真は津波伝承館の中にある、震災当時の国土交通省東北地方整備局内の再現であり、震災の状況の把握に努めた。

スライド 4-2

たのですね。

こちらは岩手県の高田松原国営追悼・祈念施設です（スライド 4-2）。奇跡の一本松で話題になった所があります。この写真は津波伝承館の中にある写真でして、震災当時の国土交通省の東北地方整備局の再現をしたものです。つまり震災当時、ここで整備局の方が震災の把握に努めていたという状況を示しています。こちらが大船渡の津波伝承館です。この大船渡伝承館というのは実は観光物産協会の中に間借りする形になっています。地元在住のボランティアの方が映像を見せると共に、震災当時の話や教訓について説明してもらっています。

こちらが釜石市です。これは施設ではないのですが、「いのちをつなぐ未来館」という伝承館です（スライド 4-3）。ラグビーのワールドカップで使用された釜石鶴住居復興スタジアムのそばです。

この後ろ姿の女性スタッフは震災当時中学生でして、ちょうど小学生の手を引いて避難してきた自分の実体験を、語り部として案内してくれます。これは8月末ですから景色よく見えますけど、震災当時は雪が降っていたので、多分凍えた道を避難してきたと思われます。以上、いくつか伝承施設、震災遺構と伝承施設をご紹介します。こちらで少し、震災遺構、伝承施設の特徴とか、今後の課題的なものをお話ししていきたいと思っています。

まず、震災遺構、伝承施設の特徴ですが、高田松原の施設が国営であるように、国や自治体直営のものもあれば、NPOも含めた民間のものもあります。伝承施設、震災遺構はさまざま、展示物とか映像が中心のものもあれば、被災体験をもつ語り部の方の説明が中心になっているものもあります。多くの施設は津波による建物の被害、破壊状況とか残存物をそのまま残しています。実はどの施設を訪れても「津波てんでんこ」の重要性をうたえます。この「津波てんでんこ」というのは、「津波が来たら、取る物も取り敢えず、肉



震災遺構・伝承施設(7)

いのちをつなぐ未来館(岩手県釜石市)



未来館は釜石市鵜住居地区にあり、近くには、ラグビーW杯でも使用されたスタジアムがある。

震災当時中学生だった語り部が、当時の避難経路を案内してくれる。

スライド 4-3

親にも構わずに、各自でんでばらばらに一人で高台へと逃げろ」、「自分の命は自分で守れ」という意味です。どの施設に行ってもこれだけは重要視され、強調されています。

では、この伝承ネットワークの課題を、私のほうで3点ほど挙げさせていただきます。まず1点目ですが、震災遺構を保存し伝承施設を造ってはみたけれども、将来にわたって維持や保全が可能かという問題です。これは維持管理コストの問題とってよいでしょう。今からお話することは視察先でのヒアリングでわかったことですが、気仙沼市の伝承館、先ほどの旧気仙沼向洋高校です。その伝承館が震災遺構をそのままの形で保存することになりました。これは気仙沼市民にアンケートを採った結果だそうです。けれども、そのままの形で残すということは、当然ですが、年間維持管理費が上がります。収支均衡のためには年間で7万5,000人の来客が必要になるそうです。気仙沼市の人口は7万人いません。それで、もう一つの問題が、先ほど水口さんは公共政策がご専門というお話でしたが、実は私が大学で授業をしていたのは公共選択論という科目でして、いわゆる行政の非効率とかそういったことに関する学問です。そのなかでは、本当にそんなに伝承施設が必要なのかということが話題になります。効率性を考えると、伝承施設というのは一定の被災地域をまとめた上で整備をすることが望ましいということです。これは、財政上の効率を重視した見方です。ただ、一言で地震災害と言っても、それは地震の特徴によって違いますし、地域によって受けた被害も違います。ということは、被災地ごとに震災の被害が異なるのです。ですから、被災地ごとに伝承施設が存在することも、それは意義があることだと思います。

そして、2点目の課題ですが、これは語り部の継続性です。いくら立派な施設もしくはその当時の様子をあらわす遺構があったとしても、実際それを説明してくれる人、その当時の状況を話してくれる方が必要です。やはり、被災体験をもつ方やご遺族の方による説明は説得力があることは確かです。ただ、被災した地域というのは、東北の高齢化率の高

い地域です。よって、実は高齢の語り部の方が多いというのも事実なのです。そういう意味では、若い人にいかに伝承するかということも重要だと思います。さらには、どんな問題でもこれはありますが、いわゆるボランティア的な手弁当て語り部を続けていくことの難しさ、これは理解しないといけないと思います。そうやっていきますと、数十年、数世代、数十世代にわたって教訓を語り継ぐためには、やはり語り部の話の映像資料化が有用だと思っております。

そして、3点目の課題としましては、震災遺構、伝承施設の立ち位置という話を触れたいと思っています。これは多少、私の気持ちも入るのですが、伝承施設や震災遺構が責任の糾弾の場になってしまうことは避けた方がいいと思っています。いわゆる政治活動の場への変容です。津波災害による人為的な失敗を過度に強調し、そのことを責める場に変質してはならないと思っています。この震災遺構、伝承施設を巡る旅ですが、近年ではダークツーリズムと言われていています。広島原爆ドームであるとか、海外であればドイツの旧ナチスの施設への旅が挙げられます。実際、こういう施設に行くことをツーリズムと言っているのかという疑問もあります。被害に遭われた人への追悼、さらにはそこから歴史を学ぶ旅をするという意味がこめられています。ただ、それが過度に間違った方向、いわゆる責任追及の場、誰かを追求する場、政治活動をする場になってはならないと思っています。そのためにも、震災遺構、伝承施設は歴史的な事実を伝える場であることを再確認することが重要であるということ、課題として挙げたいと思います。

では、最後に伝承についてまとめさせていただきます。津波災害の伝承という話で発表させていただきましたが、実はこの津波災害は、過去から伝承があったわけです。それがしっかりと行われてきたからこそ、「津波てんでんこ」という考え方が今でも残っているわけです。この「津波てんでんこ」は、「自分だけ逃げて、大事な人を見捨てるのかよ！」と反感的に伝わってしまう場合もありますが、それだけ津波は怖いということです。この「津波てんでんこ」の考え方がしっかり残っている地域もありましたが、残念ながら、残っていなかった所もあります。東北の沿岸部、今でも残っている石碑とか神社、これらはもともと津波災害の教訓を後世に伝えることを目的に建てられたものが多いのです。東北地方は、明治三陸地震とかチリ地震の被害にも遭いましたが、もっと前にも貞観地震とか、そういった時代からたびたび津波災害に遭っています。一例として、仙台市にある浪分神社は、かつての貞観地震で津波がきた所に建っているわけです。そういった石碑や神社は、津波災害の教訓を後世に伝えようとして建てられているわけで、石碑とか神社は先人の知恵だったわけです。やはり、こういったものは残す必要があるということです。

では、21世紀の今はどうやって残すか。当然そうなってくるとこれは現代の技術ですから、映像とか伝承施設という形で、津波災害の教訓を残すことになると思っています。教訓の風化だけは避けなければならない。これは津波に限らずどんな災害でもいえることだと思います。これで私の話を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。